釣れ釣れなるままに

２００３年思い出の釣行記 PART.　４

因縁正気

釣遊会第４回大会

☆開 催 日	𠮷１５年７月１３日		
☆開催場所	千平～泉浜港		
☆入釣場所	オンコの沢		
☆潮	満潮	００：５９	１５６㎝
	干潮	０８：５７	８㎝
☆釣　　果	アブラコ	４７５　㎝	３匹
	カジカ	３２６　㎝	１匹
	アカハラ		１匹
	重　量	３６４　０ｇ	
☆成　　績	合　計	１１６５　点	
	成　績	身長優勝	
	持ち点	２　点	
	累計点	９　点（３，１，３，２）	

メンテナンス

前大会で長年愛用した竿を折ってしまったので、ボーナスの小遣いを叩ことになる。『カナダ屋釣具店』から大売り出しの案内をいただいていたが暇が無く、その期間中には行くことが出来ず、出発日を迎えてしまった。大枚を叩いてシマノのサーフリーダー４５０ＣＸ－Ｔ３０号を購入する。この竿は前回購入のものと同じものである。私にとっては手頃な値段であり、今まで使っていたものよりは飛距離がグンとアップし、自分の技術が向上したのかと錯覚してしまうものであった。しかし、これからも浦島太郎１号（加藤啓氏）の愛用竿、スピンパワーによる菅原隆擬（もど）き大遠投の文章を、指を銜えて読むことになるのであろう。

仲間の堀内氏が『岩見沢とんとん会』の大会で竿をセットしようと、三脚と一緒になった竿のバンドを外した。そして、仕掛けを取りだしている最中に、背後でガタガタと音がする。慌てて手を伸ばした時にはすでに、竿３本ともが海中に転がり落ちて沈んでいった。竿を伸ばしていれば沈むことはなかったと後悔しても後の祭りである。その竿は私には到底手のでない代物である。堀内氏のことだから竿を惜しむより、大会に参加できない悔しさの方が大きかったのではないかと推測する。

リールを反転させるためのストッパーが動かなくなった。仕掛けを上げ下げする時、投入後に仕掛けの位置を調整する時等に不都合この上ない。自分でメンテナンスすればいいものを潮に浸かったリールをそのまま放っておくものだからこのようなことになる。リール糸を購入する口実をつけて店員さんに修理を頼む。時間を掛けて丁寧に分解して頂いたが、中が錆び付いていては修復不可能であると告げられた。これでなけなしの小遣いを叩いて揃えたダイワトーナメントサーフＺの２台を駄目にした。現在稼働中の１台は、以前やはりリール糸購入時にメンテナンスして頂いたものである。ダイワのパワーサーフ５０

００ＱＤを購入する羽目になった。購入するたびにリールの命であるボールベアリングの数が減っていく。涙を呑んで小遣いに別れを告げようとしていると、その姿を社長が見かねたのであろう。定価の２割引のところを３割引にしてくれる計らいをして頂いた。　レシートで確かめると

普及海ロッド	￥３２，０００	－２０％	￥２５，６００
－３０％	－９，６００		
スピニングリール	￥２４，０００	－２０％	￥１９．０００
－３０％	－７．２００		

とあり、割引値段から更に５，０００円も値引きしてもらったことになる。
社長に丁寧に頭を下げると、この次３個揃える時の足しにして下さいとのお言葉である。
いつになることか・・・。

負け惜しみ

『札幌優釣倶楽部』の賀集氏が店内を物色している。会での成績を尋ねると、一昨年は年間優勝に輝き、昨年は最後の大会で他の者に「譲って」準優勝だったそうである。確かに「譲った」と彼は言うが、果たしてその内実はどうだったのだろう。一般的にはこのことを『負け惜しみ』と言うのではないだろうか。

彼は、ご子息が誕生してからは、すっかり釣行が少なくなったと言う。しかし、以前の彼は週に何度も釣りに出かけていたのだから、今でもかなりの回数になっているはずである。話は、ツケエサやコマセにまで及び、取って置きのマル秘情報を耳打ちしてくれる。彼は秘密めかして言うが実は以前、札幌の釣り会に所属する御仁が話してくれた内容と同じなので、北海道の釣り会では一般的なのであろう。そのことは彼に伏せておき、感謝の言葉を述べておく。

また、太平洋での釣りは、昆布やホンダワラの下にエサを落とさなければならないので、オモリは５０号や６０号を使っているそうである。これも一般的なようではあるが、私にはそれが出来ない。相変わらず軽いオモリを使って、仕掛けを海藻の上に漂わせているか、海藻の付いていない岩盤に乗せて、ハゴトコばかりを釣っている有様である。彼の強い勧めもあり、５０号のオモリを６個購入する。

女房が車で迎えに来て、エサの量の多さに呆れて出た言葉が「海に撒いてくるんでしょ」である。その通りではあるが、使い切れずに余して撒いているのが現実である。しかし、そんな危険な表現は避けておく。心の奥底では「そのお金で旨い魚が・・・」と思っているはずだが、それを言わない奥ゆかしさ（？）が負担になる。そして、他の会員はもっと凄い量なのだと付け加えておく。女房はどう思ったか、釣り道中の酒とつまみを買っておいてくれた。釣りエサにエビも必要だったとは言えずに、自分で賄うことになる。

我が家に戻って購入したばかりの竿のフィルターを剥がし、リールをセットしようとしたら、その竿が北海道仕様のローシートではなくハイシートであった。カレイやキス釣り

での遠投にはこれでよいのだが、磯周りを狙う釣りには向いていない。そんな初歩的なことも確認しないまま購入してしまった自分に腹が立つ。フィルターを剥がしてしまった後では、交換を願うわけにもいかない。リールシートがロー、中、ハイと揃い、竿バックには収まりやすくなったのをせめてもの慰みにしよう。これも負け惜しみというのだろうか。

荒波との戦い

出発時の空模様は晴天で風もなく気温も高い。えりも方面の天気もよいだろうと勝手に思い込み、雨具を持たないで出かけた。しかし、集合場所に着くと、仲間から雷警報が発令されたと伝えられる。となると雨も伴うのだろう。今更取りに戻ることも出来ず、何とかなるだろうと楽観主義者の本領発揮を決め込む。そして、仲間に雷対策を伺う。竿が高圧線に触れての感電死は聞いたことがあるが、カーボン竿に雷が落ちて死んだという話は聞いたことがない。しかし、皆の話を総合してみると、雷が鳴っている間は竿から離れているらしい。中にはゴロッと鳴ったら竿を離しているという強者（つわもの）もいたが、光った瞬時に離しても、その時はすでにお陀仏であろうと考える。なんと悠長な御仁かと思う。

宇遠別第１覆道（年が明けた１月１３日、大規模な土砂崩れで死亡事故発生）を抜けたところで岡氏と共に下車する。佐々木氏は阿部会長をオンコの沢トンネル手前にエスコートしてから戻ってくるという。吉井氏もオンコの沢第２覆道で下りるという。私も含めて５人がオンコの沢界隈に下り立った。いざバスから降りてみると、入釣を躊躇するような大荒れで、防潮堤下には大波が打ち寄せている。トンネル手前の砂浜が比較的穏やかなので防潮堤の上からなら何とか釣りは出来そうだが、車道とのスペースは１ｍ程であり危険この上ない。一旦オンコの沢トンネルを抜けて海況を伺うも、どこも同じ状況である。

私が狙いとしていたオンコの沢第３覆道下の湾洞では４名もの釣り人が入釣している。

この界隈では波が一番死んでいるようだが、この波では一投一投根がかり覚悟であろう。防潮堤に打ち付けられた荒波を見て、怖じ気付いたか？岡氏が今来た道を戻ってしまった。私は、更に先を進んでみるがその様子に変わりはなく、オンコの沢第３覆道北口階段下まで戻って、荒波の中に仕掛けを投入した。

やはり、状況は厳しい。１本バリ仕掛けを４０号のオモリで打ち込むが根がかりばかりを繰り返す。本日購入した５０号に替えてみると、比較的安定したがアタリは全くない。しかも、時々思い出したようにウネリが前の大岩にぶつかり頭からもその飛沫が降り注いでくる。

それでも丁寧に２時間ばかり打ち返したが全く反応がなく、移動することにしてオンコの沢第２覆道手前に下りた吉井氏の様子を伺いに行く。彼も荒波と格闘中である。しかも、国道下を流れる川の通路が流木で塞がれていて通り抜けることが出来ない。唯一の下り口を失いテトラを伝っての入釣だったとのことである。しかし、その涙ぐましい努力の甲斐があってか、アカハラが２本来ており、最後までこの辺りで頑張るつもりだと言う。

私は、また来た道を戻って今度はオンコの沢トンネルの南口にいるであろう３名の仲間の様子を伺いに行く。この荒波の中、佐々木氏がアブラコを上げている。阿部氏がカジカとハゴトコ、岡氏はハゴトコのみということだが何某（なにがし）かの釣果はあるようだ。

獲物が全くないまま白々と夜が明けてきた。宇遠別第１覆道北口階段から下りて砂浜に立つ。何とか釣りが出来そうな所でアカハラ仕掛けを波打ち際にドボンとやる。２本目を用意している間に、１本目の竿が糸フケしている。更に道糸が流れ昆布等に絡まり、竿が今にも海に引き込まれそうになった。道糸の縒（よ）り糸が昆布やゴミと一緒になって団子になってこんがらがっている。仕掛けを単純なものに取り替えて打ち直す。それでも状況に変わりはない。

１本を投入→もう１本のゴミの付いた仕掛けを引き上げる→仕掛けの絡まりを解く→エサを取り替えて投入→先程投入した竿にゴミが付き流されているのを引き上げる→→→。闇雲に同じ動作を繰り返すばかりである。しかし、それでも何とかゴミの中にハゴトコが混じっていた。ゴミの中に３０㎝を越えるアカハラも混じっていた。一応２魚種が揃ったのですぐさま移動する。

因縁生起

６時、オンコの沢トンネルから第２覆道までもう一度丹念に見て歩き、一番波が死んでいるオンコの沢トンネル北口階段を下りる。随分と浅そうだが沖の岩で波が打ち砕かれ、そこだけが緩やかに昆布が揺らめいている。

来た！アブラコである。メス３５㎝程が**やって来た**。続けて３０㎝程のアブラコ。

来た！来た！３０㎝を超えるカジカが**やって来た**。嫁のアカハラがカジカに替わる。

来た！来た！来た！コンブをグリッ、グリッとかき分けて大アブラコが**やって来た**。メジャーを当てると５０㎝を僅かに超えている。前大会までの最大身長は堀内氏の４８．８㎝

である。ハリが飲み込まれていたが、審査時までに少しでも魚が縮まらないようにと一応フラシに入れる。

私たちの身の回りには、次から次へと厄介な問題が起こる。健康のこと、家庭のこと、取り巻く人間関係のこと、資金繰りなどの経営上のこと、そのたびに動揺し、狼狽えてしまう。ところが、これらは決して突然に降って湧いてくるものではない。身の回りの出来事は、何らかの形で互いに関係し合っているものである。これを仏教では『因縁生起』と言うそうだ。全ての現象は必要、必然だと考えて、物事をありのままに受け入れることが出来ると、その原因は自分自身の中にあることに気づく。怠惰であったり、謙虚さを忘れていたり・・・。そのことを反省し、詫びて、見栄を捨て、自らを変える勇気があれば、事態は必ず好転することになると考えている。

私たちが愛する釣りは、温涼風雨陰晴満干清濁によって左右されるものである。今回、オンコの沢入釣に迷いはなかったが、いざ現場に下りたってみると、様々な困難（風、雨、波、雷、ゴミ）が待ち受けていた。その事態を嘆き悲しみ、自然のせいにして受け入れなかったならば、この大アブラコを手中にすることは出来なかっただろう。ありのままを受け入れて事態を解決すべく様々な手を尽くした。その結果、神が自然の慰みを我に与えて下さったのだろう。

大自然の分身

潮がいよいよ引いてきた。ガンジというのだろうか？　ハゴトコに似て細長く黒っぽい頭に冠のような飾りを乗せた魚がやってくるようになった。魚には極力手を触れないようにハリを外し海にお帰り願う。隣の溝に移動する。狭い溝で、風が出てきたこともあって高い岩に道糸が擦れる。そして、釣れてくるのはハゴトコばかりになった。

その溝の近くで、漁師が腹這いになって海の中に両手を突っ込んでいる。婦人も近くで見守っている。タコ捕りとはどうも違うようだ。昆布拾いでもなさそうだ。何をしているのかを聞いてもニャッとするだけで答えてくれない。そして、「そんな浅いとこ釣れないべや」と宣う。すかさず、「５０㎝のアブラコが釣れました」と返しても、またニャッと頬を歪めるだけである。

吉井氏がやってきて、防潮堤の上から何やら叫んでいる。「アブラコ！」と叫びながら、両手を大きく広げてみせる。吉井氏もニャッと口を斜（はす）に曲げながら近づいてくる。そして、潮溜まりに浸けておいたフラシを引っ張り上げてからようやく真顔になった。

審　査　結　果

優　勝	島　強二	１２７２点	(ｱﾌﾞﾗｺ447㎜+ｶｼﾞｶ　375㎜+4500g) 有明
準優勝	谷口良幸	１０７９点	(ｱｶﾊﾗ407㎜+ｶｼﾞｶ　382㎜+2900g) 音調津港
３　位	山岸　伸	１０７３点	(ｶｼﾞｶ　399㎜+ｱｶﾊﾗ370㎜+3040g) 音調津港
身長優勝	鹿島釣狂	アブラコ	４７．５㎝

私は１１６５点（アブラコ４７５㎜+カジカ　３２６㎜+３６４０ｇ）の２位にくい込む成績であったが会の規定により身長優勝を頂くことが出来た。音調津港に入った仲間はシラミカジカを釣ってきた。初めてみる魚である。確かにカジカの如く頭は大きいが、その割には胴体がスマートで長い。重量は稼げなくても身長を稼ぐにはいい魚である。

食後に辺りをぶらついていると、『北海道釣名人会』の審査が行われていた。知った顔が見えるのでその様子を伺っていると、金井泰樹氏が１９００点台で優勝した。襟裳岬先端での釣果であるが「バッカンを持ってみろ」と促されたので、手に取ると入釣前の私のバッカンの如くズシリと重い。１本の大物で満足している私はいったい何ナノだと思わされる。

岩見沢釣遊会から巣立って札幌釣り会に所属するメンバーが皆活躍している。冒頭で紹介した賀集雅隆氏をはじめ堀孝行氏、森田正実氏がそれぞれの会で年間優勝を飾っている。金井泰樹氏は今更ここで述べる必要はないだろう。今村俊雄、佐々木忠良、佐々木秀美、宮野一成、荻野一利、矢根政仁、湯浅伸一の名は何度もこの『北海道のつり』の釣界通信でお馴染みである。

彼らは四季を味わい、自然の理にかなった釣りを試みているのだろう。「自分」とは「大自然の分身」のことである。自分が他との関わりの中で存在していることを忘れると、自然や人間に対する思いやりを欠いてしまう。これからも、己が大自然の分身であるという立場を弁（わきま）えて釣りを楽しんでいきたいものである。

【つれづれ】

近投はゴミが付くので全て遠投している岡、佐々木の両氏は平然としているが、魚のアタリもないという。阿部氏がやって来て「オモリ４０号ないか」と聞いてくる。私の４０号は太平洋標準仕掛けとして中通しで使っており持ち合わせはない。それ以外の釣りを想定して２０，２５，３０，３５，５０号を僅かばかり用意している。その中から５０号を進呈する。５０号の残りは２個になった。

５０号のオモリがなくなった。これ以上続けていても根がかりを繰り返すばかりであろう。少し早いが片づけることにする。少し広くなった駐車帯まで戻って、バスを待つ。手稲フィッシングクラブと野幌釣り会のメンバーもバス待ちをしている。それぞれの釣果と

本日の戦いぶりとを確かめ合い、交流を深めた。

　この身長の縮まり方はなんだ。釣り上げた時にメジャーを当てると確かに５０㎝あったはずだ。前回の大会で４８．６㎝のアブラコを釣り上げた堀内氏に「釣り上げたときは５０㎝を超えていたんでしょう」と尋ねるが意に介さない。５０㎝にこだわる私にとっては、この堀内氏の何ともおおらかな態度が理解できない。

　審査会場のエリモ公園のすぐ近くに寿司店がある。この時間帯はいつも閉まっていたのだが、ラーメンの幟（のぼり）をはためかせて開店している。エリモで食べるラーメンは味がイマイチだったが、ここのラーメンは旨い。チャーシューが軟らかく麺とスープがよいハーモニーを奏でている。